

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

《人社系》

●北海道教育大学教育学研究科学校臨床心理専攻

「現職教員の高度実践構想力開発プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ①教育学博士の学位を取得している若手のリサーチメンターを登用し、大学教員と協働した継続的なりサーチメンタリングを実施しました。
- ②大学教員みずからが大学院生の勤務校に訪問し、教育実践の事例に即して指導・助言する参画型のスーパーヴァイズを継続的に実施しました。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・メンタリングと大学教員による参画型スーパーヴァイズを有機的に運用できるように月1回のメンターと大学教員の会議を定例で開催し、大学院生毎の指導ファイルを作成することにしました。
- ・大学教員による参画型スーパーヴァイズにメンターを同行し、またメンタリングに大学教員が同席して、メンターと大学教員の大学院生に対する一貫性のあるかわりを進めることができるように考慮しました。
- ・メンタリングは、個別、グループ等の形態を工夫し、大学院生の自律的な学びをサポートできるように考慮しました。また、出張によるメンタリングも実施し、4つのキャンパスのどこでも大学院生は公平にメンタリングを受けることができるように工夫しました。
- ・大学院生の勤務校訪問に際しては、勤務校と綿密な連絡調整を行い、趣旨を理解いただくとともに、教育現場との日常的な関係構築を意識しました。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・大学院生の研究テーマの構想や研究動機の開発に有意義な影響を与えることができ、質の高い学位論文作成に繋げることができました。
- ・メンターと大学教員の意思疎通が進み、個別の大学院生への一環した研究支援が可能となりました。
- ・大学教員が、学校現場の臨床的・実践的なニーズを反映させたカリキュラム改善を常に意識しつづけるようになりました。

●千葉大学人文社会科学研究科

「実践的公共学実質化のための教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

留学生の日本語学術論文等の作成支援として、修了生をチューターとして雇用し、論文

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

提出までの2ヶ月間、対面および電子ファイル上で指導を行った。報告書やレジュメ等の簡単な書類についても 随時、日本語チェックを行った。平成19年度の指導件数は、博士論文3件、修士論文7件、紀要論文4件、その他原稿3件であった。また平成20年度は、博士論文7件、修士論文6件、紀要論文9件、その他原稿40件であった。そして平成21年度は、博士論文4件、修士論文8件、紀要論文4件、その他原稿40件ほどであった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

修士論文・博士論文の日本語チェックを担当するチューターを採用する際には、できるだけ分野の近い者同士を選び、また必ず最初に対面で打ち合わせをすることによって、意思疎通を円滑に図れるよう工夫した。また、報告書やレジュメ等の日本語チェックについては、内容・枚数や締切日等を詳細に記した「申込書」を提出させることによって、求められている内容を迅速に把握し、的確な対応ができるよう工夫した。この申込書の形式は、学外から視察を受けた時に、最も参考になったものの一つとして評価された。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

修士論文・博士論文に関する計画的できめ細かな日本語指導と、報告書やレジュメ等の臨機応変で迅速な日本語チェックを併せて行ったことによって、留学生からの評価はきわめて高いものとなった。このプログラムがあったことで論文を完成できたという声も聞かれた。また、指導教員からも論文指導の上で大変助かったとの感想があった。さらにチューターからも、金銭的な面で助けとなっただけでなく、自分の論文や日本語を反省する契機になったという感想があった。このように学内で大変な好評を博しただけでなく、学外からも日本語論文指導のしくみについての視察を受けたことから、この取り組みが他大学からも注目され、一つの成功事例として認識されていることがわかった。

●東京外国語大学総合国際学研究科国際協力専攻

「平和構築・紛争予防修士英語プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本PCSコースでは英語で授業を行っており、論文も英語で執筆する。論文作成支援として、“Thesis Guidance”という授業を分野別に開設、学生は自分の研究テーマにそって履修する “Thesis Guidance”を選択できるカリキュラムを提供。指導教員とともに複数教員による論文指導体制が可能となった。

- ・論文執筆だけではなく、論文発表能力向上を目指し、英語ネイティブの外部講師を招き “Presentation Workshop”を開催し、実際のプレゼンテーションを行い、指導を仰いだ。
- ・論文発表の場を提供すべく広島大学との「論文合同評価会」を開催。両大学の教員の指導のもと、それぞれの大学の学生による研究発表と討議を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

- ・英語圏・非英語圏からの学生間に見られる英語能力の差に考慮し、画一的な授業ではなく、学生個人のニーズに合わせた授業を展開するよう工夫を凝らした。
- ・「書く」ことを苦手とする学生向けに博士後期課程の学生および同じ修士課程の学生による勉強会を開き、学術論文の書き方などについてピアティーチング方式による補習を行った。
- ・複数の教員により論文指導が行われることになるため、異なる指導法により学生が混乱しないよう、指導教員と授業担当教員との間で十分なコミュニケーションをとるよう心がけた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

カリキュラムの拡充とともに、論文執筆支援に力を注いだことにより、学生による論文発表および学内外の研究会における研究報告の件数が増加した。また他大学との論文合同評価会は、学生にとっては鍛錬の場となり、教員および学生から得られた率直な意見や指摘を修士論文に反映させるなど論文の内容向上にも役立っている。これらの経験は学生にとっては大きな自信となっており、本コースを修了し博士後期課程に進学した学生がその後海外でも著名な国際学会で複数回研究発表を行うなど、海外における本学の認知度向上にもつながっている。

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの場としての大学院」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本プログラムの開始以前から、修士論文執筆のための研究分野ごと(地球社会研究は専攻全体)の修士論文発表会、最終試験の実施による集団指導、博士論文執筆のための論文指導委員会の設置という制度を導入していた。これに加えて、本プログラムでは修士課程院生には入学直後のキャリアデザイン講習会において修士課程のプランニングをさせ、修士論文作成と就職・進学を早期に意識化させた。2回目の修士課程院生向けキャリアデザイン講習会では修士論文を提出した博士後期課程1年生の先輩を講師に招いて修士論文執筆について講演をしてもらった。博士後期課程については、博士後期課程1年生を対象に、アカデミックキャリア講習会を開催し、アカデミックキャリア支援者が博士論文執筆の構想について講義したり、博士号取得直後のジュニアフェローに博士課程の研究・生活、博士論文執筆の体験を講義してもらうなどの企画を実施した。またアカデミックキャリア支援者が行う個別相談においても博士論文執筆上の相談に応じた。高度職業人養成科目のうち、企画実践力強化部門は、院生のフィールドワークや海外学会発表等の研究企画に対して、競争的資金の形式で、研究資金を助成するものであり、院生はこれを利用して博士論文や修士論文のための研究に必要な調査や学会発表を行った。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

従来からのゼミ制度を通じた指導教員による指導、修士論文発表会や論文指導委員会によるゼミを超えた指導に加えて、本プログラムがキャリアデザイン講習会やキャリア支援者の個別相談を通じての論文作成支援を行ったことで、院生には多面的な指導や相談が行えるようになった。これら相互の連携を深めるために、教員に対するFDを実施して、キャリア支援事業による講習会や個別相談、高度職業人養成科目の企画実践力強化部門による研究助成についての教員間での理解を広める努力をした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

平成20年度第2回のノン・アカデミックキャリア講習会では、修士論文執筆のプランニングと就職活動のプランニングと題して開催し、参加者数22名、満足度100%であった。平成21年度の修士課程新生を対象とする講習会では、修士論文執筆のプランニング、就職活動のプランニングを実施した。参加者は65名、満足度は90%以上であった。これは、院生が研究を計画的に構想することの意識化を図ったものである。企画実践力強化部門の若手研究者研究活動助成については、採択者に対するアンケートの結果から、助成でフィールドワーク等の調査ができ、修士論文や博士論文の研究が進展したことを評価する声が聞かれた。

●神戸大学経営学研究科会計システム専攻

「経営学研究者の先端的養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

論文の国際的な評価を組織的に高めていくために、ゼミにおける研究指導を補完するためのセミナーシリーズ(論文作成セミナー、投稿・発表セミナー、研究セミナー、博士論文発表会)を導入した。

論文作成セミナーは、講義によって行われるコースワークと、ゼミで行われる研究指導の中間的な仕組みであり、研究におけるデータ分析の指導をゼミの枠組みを超えたセミナー方式で行うものである。投稿・発表セミナーも中間的な仕組みであり、成果が出た研究をどのように世界に発信していくかをゼミの枠組みを超えたセミナー方式で行うものである。1つは、論文を国際的な査読付き学術雑誌に投稿していくトレーニングセミナーであり、もう1つは、国際学会発表のトレーニングセミナーである。

研究セミナーは、他の研究者が行った研究を本人から解説してもらう場であり、博士論文発表会は、博士論文提出予定者全員が、その博士論文仮審査の段階で、その博士論文の内容を1時間の公開セミナーで発表するものである。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

論文作成セミナーでは、ゼミにおける研究指導との整合性、補完性を高めるため、手法の専門教員と論文に関連する領域で該当手法に関する分析知見のある教員がペアとなって指導に当たることができるようにした。例えば、マーケティング分野の統計的分析を扱う論文指導においては、統計的手法の専門教員とマーケティング分野で統計的分析知見のある教員（いずれもゼミの指導教員以外）がペアとなって論文指導に当たるよう調整を行った。

投稿・発表セミナーでは、国際的な査読付き学術雑誌への投稿を促すため、海外から査読付き学術雑誌のエディターの立場にある研究者、ないしは豊富な論文発表経験のある研究者を招いた。また、国際学会発表のトレーニングセミナーでは、国際コミュニケーションの専門家を招き、その発表を直接指導し、学生が、発表スライドの作り方から英語による発表の仕方まで、国際学会での自分の実際の研究の発表を実地にトレーニングできるようにした。

研究セミナーは、他の研究者が行った研究を本人から解説してもらう場であり、国内外からの一流研究者を招き、その研究について発表してもらった。このセミナーは、欧米の研究界ではシステム化されている大学間の恒常的オープンセミナーの仕組みを導入したものである。博士論文発表会は、課程博士号の透明化の仕組みとして導入したものであるが、教員・学生からの批判・質疑応答を聴講することに教育的効果があることから、積極的な参加を促した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

論文作成セミナーを導入したことで、2006年度までは授業における統計学の教授と、ゼミにおける研究での統計学利用の指導とが分離されていたものを、学生が双方をリンクさせて研究できるようになった。また、投稿・発表セミナーを通じ、学生は、どのようにすれば査読付き雑誌に投稿できるかを知ることができるようになった。そして、国際学会発表のトレーニングセミナーによって、国際学会発表における言葉、文化の壁を越えて研究成果を発表できるようになった。

研究セミナーは、学生は、このセミナーに出席することで、発表者が語る国際的水準の研究内容を知るだけでなく、セミナーを通じて行われる研究の精緻化の実際に触れ、自らも同様に研究することを学ぶことができるようになった。そして、博士論文発表会によって、指導教員やそれ以外の教員、在学生、さらには学外参加者も参加することで、幅広い批判、質問に対する対応力を身に付けることができるようになった。

以上のような取組みに呼応するかのようにより、学会報告者数と査読付き論文発表数の増加が見られた。学会報告者数は、プログラム実施2年目にあたる2008年度に81人と前年度の47人から大幅に報告数が増加した。また、2007年度までは毎年10人未満だった海外学会の報告者数は、2008年度には全報告の81人中27人となっており、国際的な活躍を志向する学生が増加した。また、論文発表については、総論文数のうち査読付き論文数の内訳

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

は、2006年度は53本中11本、2007年度は49本中10本、2008年度は47本中15本、2009年度は49本中13本となった。

●立命館大学言語教育情報研究科言語教育情報専攻

「国際通用性を高めた言語教育専門家の養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

英語および日本語のライティング・チューターを配置して、英語論文・レポートの執筆支援をはかり、また留学生の日本語での論文・レポート作成の支援を正課科目外で行った。こうしたライティング指導の成果が、修了時点の研究ペーパーの作成にも反映するようにした。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

英語のライティングチューターは、前期はTESOLプログラム参加者の事前指導ともなるようなライティング指導を行い、後期は英語論文ライティングの個人指導としても機能することをめざした。外国人留学生の日本語論文執筆の助言や指導には、日本語ランティングチューターを配置して日常的な相談に乗れるような体制を作った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

年度末に発行する院生論集には、修了予定者の中のレベルの高い論文が多く集まり、毎年度発行することが可能となった。また、こうした院生論集の発行は、1回生など、これから論文執筆を予定している院生のための良い見本にもなっている。

《理工農系》

●東京農工大学生物システム応用科学府生物システム応用科学専攻

「ラボ・ボードレス大学院教育の構築と展開」の事例

(具体的に何を実施したのか)

優れた英語論文を数多く発表した経験を持ち、既に退官した著名な教員や研究者をPublication Technical Assistant Professor (PTAP: 発表技術支援教授)とする制度を確立し、学生に対するきめ細かな英語表現の個別指導を行うことによって、博士論文のみならず、国際的に評価される論文作成の能力の向上を図った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・大学院教育の中で、英語表現能力を身につけさせることは最も重要な課題の一つであると考え、研究成果に関する国際会議での英語発表や英語論文の執筆など、英語表現に関して、研究室の指導教員ならびに先輩の能力に強く依存しないように、英語表現専門教員によるPTAP制度を導入した。
- ・英語教育の指導は添削だけでなく、対面式指導を基本とした。
- ・学生の英語能力のみならず、指導教員の英語能力の向上をめざし、専攻全体の英語能力

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

の共通財産になるように努力した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・ 3年間の PTAP の先生の英語添削の指導内容をまとめてみると、多くの学生が共通して間違い易い文法的な誤りが見つかったので、それらを表にまとめて、学生および教員に配布し、本専攻の構成員全体の英語表現能力の向上に役立てた。
- ・ 学生が発表した論文数も平成 21 年度には総数で 110 報を超え、本教育プログラムを実施する以前に比べて 4 割近くも増加した。

《医療系》

●岡山大学医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻

「ユニット教育による国際保健実践の人材育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

ハーバード大学公衆衛生大学院から教授・准教授を招聘し、共同研究を実施するとともに、その研究について関連のある直近の論文レビューを行うとともに、自身が著名雑誌の編集者でもあることから、編集者の視点からも指導を仰ぐことができた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

指導を仰ぐ際には、受け身ではなく常に自分の意見を述べ、新たなアイデアを出すことにより、指導者から関心を持たれるよう院生を指導した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

岡山大学医学部出身者が疫学・衛生学分野の大学院に入学するようになり、また、大学院卒業生等 4 名が助教として活躍・採用となった。